日本の民族衣装　キモノ

呉服店社長
みわ　のぶゆき

◆歴史

キモノは呉服とも言い、今から1800年ほど前の中国にあった「呉」の国（222～280年）で織られた絹織物が日本に伝わったことから、この名前が付いたといわれています。

ただし、民族衣装としてのキモノが今と同じ形になったのは江戸時代で、その後、数百年の間に小さな変化や簡略化はありましたが、大きく変わることなく現在に至っています。

またキモノに使われている柄は、日本独自の物ばかりではなく、西アジアを起源とし、シルクロードを通って多くの地域の影響を受けて日本に伝わった物も多く、アジアの終点として様々な国の文化に彩られています。

◆衣装の構成

●衣装としてのキモノは以下のような物、一式で1セットとなります。

ア）長着：上着、いわゆるキモノです。
イ）帯：長着を着た後に胴体に巻く幅の広いベルトのような物
ウ）襦袢：長着の下に着る長着と似た形の物。ただし下着ではありません。
エ）羽織：襦袢と長着と帯を着た後にさらに上に着る物。長さは膝のあたりまで。
オ）コート：羽織とほぼ同じ。用途が少し違う
カ）帯締め・帯揚げなどの小物：帯を固定する役目も兼ねた布とヒモ。（女性のみ）
キ）足袋：キモノ用の靴下
ク）袴：洋服のズボンやスカートのような形をした物で、男性のフォーマル時に主に使われます。長着を着て帯を締めた後、この袴を履いて羽織を着る。女性が袴を身につける事は、現在では大学の卒業式や学校の先生が卒業式に出席するときに身につけることが多い。

●キモノ一式を身につける順番は

1. キモノ用の下着を着る
2. 足袋（キモノ用の靴下）を履く
3. 襦袢を着る
4. 長着を着る
5. 帯を締める
6. 帯揚げ・帯締めを結ぶ（女性のみ）
7. 羽織またはコートを着る

と、なります。着るための時間は慣れた人だと20～30分ですが、一人でさっさとこれができる人は今の日本人の中には非常に少なく、ほとんどの人は美容院などに行って着せてもらっています。また、襦袢や長着の衿を体の中心で交差させて体に巻き付けるように着るのですが、この

場合必ず自分の右側が下になるようにします。唯一の例外として、亡くなった方に着せる場合は逆になります。

また羽織とコートはよく似た形をしていますが、羽織は室内・屋外どちらで着ていても構わないのに対し、コートは基本的にキモノを着て移動するときに防寒や汚れを予防するために着る物なので、室内では脱ぎます。

ただ最近では、女性が羽織を着る事は少なくなりました。反対に男性がキモノを着るときは、今でもほとんど羽織を着ます。

◆キモノに使われる素材

絹が主流。綿は浴衣（真夏の普段着）や一部の特殊な織物に使われています。また真夏のキモノの素材として麻などの植物繊維がいくつか使われています。

◆染めと織り

キモノは加工方法で大きく分けて「織物」と「染め物」の2つに分かれます。織物は糸を先に染めておき、その糸を織っていくことで生地と柄が同時に完成します。

染め物は何も染めずに織った白生地に、後から無地に染めたり柄を描いたりしていくことで完成します。

◆フォーマルなキモノとカジュアルなキモノ

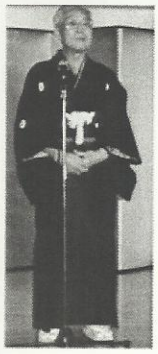
キモノにおけるフォーマル→カジュアルの順番は、以下の通り

＊女性

順序	キモノの種類	どんなキモノか	洋服で言うと
1	振り袖 	お正月や成人式に若い女性が着る、袖の長い物 ただし、未婚女性に限る	ミスが着るゴージャスなフォーマルドレス
1	留め袖（黒・色） 	黒留め袖は家族の結婚式に 色留め袖は家族の結婚式以外にも、とても重要なお祝いの時にも着る ただし既婚女性に限る 柄は帯の下にだけ付いている 必ず家紋を入れる。	ミセスが着るゴージャスなフォーマルドレス

2	訪問着・付け下げ 	一般的なお祝いの時や、フォーマルなパーティーに着る。 柄は上半身にも付いている。 柄の大きさや種類で、華やかなパーティーから、お茶席などの控えめな場所に着ることができる。 未婚・既婚どちらでも	フォーマルドレスだが、ゴージャスというほどではない
3	色無地 	グラデーションまたは１つの色で染められた柄のない物 異なる帯との組み合わせで、一般的なお祝いの時やお茶席、また自分の楽しみのキモノとして着ることができる	シンプルなドレス
4	小紋 	全体に同じ柄が付いている。 自分の楽しみとして着たり、ちょっとあらたまったお出かけの時に着る。 このキモノに家紋を入れることは無い。	おしゃれなワンピース
5	紬 	織物。絣や無地。生地はやや厚目 生産工程の全てを職人の手作業で作る一部の紬は、非常に生産量が少なく高価である	スーツ～外出用普段着

＊男性

順序	キモノの種類	どんなキモノか	洋服で言うと
1	黒紋付きに 袴 	長着と羽織の両 方に家紋が５つ入った物に、 袴 という ロングスカートのような物を履く	モーニングスーツ
2	色紋付きに 袴 	黒 以外の無地の紋の入ってない長着に、家紋が１つ入った羽織を着て 袴 を履く	フォーマルなドレススーツ
3	色紋付きのみ	上の組み合わせから 袴 を略した物 一般的なお祝いの場所やお茶席、 そこそこレベルの高い場所での食事や行事に行くときに着る。	おしゃれなセミフォーマルスーツ
4	紬 やお召し （長着＋羽織） 	現代のごく一般的なパターン お正月に着たり、ちょっとキモノでおしゃれして出かけるときに着る	一般的なスーツ～おしゃれな普段着

5	紬やお召し、他 （羽織なし） 	長着のみ。「着流し」という 仕事着として着たり、自分の楽しみとして着る	気取らない普段着

また葬式には、未婚・既婚を問わず、女性は柄のない真っ黒の無地なキモノに5つの家紋を入れた物を着ます。（家紋については次の項目を読んで下さい）

ただ、この順序とキモノその物の価値や価格は全く別の話で、特に男性の場合はカジュアルウエアである紬のキモノの方が、フォーマルな紋付きの何倍もする物がたくさんあります。

◆キモノと家紋

家紋はその家庭が先祖代々受け継いできた模様の事で、今でもほとんどの日本のお墓には、その家の家紋が彫り込まれています。

家紋は

キモノの場合も、フォーマルな物には、そのランク付けに応じて1つ、3つ、5つ、の家紋を入れることがあります。1つ紋の場合は背中の中心上部にいれ、3つ紋になるとこれに両胸の位置に2つが加わります。5つ紋はさらに両袖の後側に各1つつずつが加わります。

紋の数が増えるほどの格式が上がります。昔は振り袖にも5つ紋を入れていましたが、現在は振り袖に紋を入れることはなくなりました。逆に葬式に着る黒のキモノや既婚女性が身内の結婚式に着ていく黒留袖には必ず5つの紋が入ります。

訪問着や付下げ、黒以外の色無地は現在で入れるとしても1つだけがほとんどです。色無地の場合は紋が入っていればセミフォーマルになり、紋が入っていないとそうはなりません。

小紋や紬など、フォーマルに使うことのないキモノには紋を入れることは原則としてありません。（無地の紬の一部の物に関しては、紋を入れて控えめな立場でのセミフォーマルとする場合もあります）

← 日本のポピュラーな家紋の1つ、「五三の桐」

◆現代のキモノ事情

戦前の日本では、日本人の普段着はキモノが多く、日本の全国各地で様々な種類のキモノが生産されていました。また生産の大部分に人の手が加わっていました。

戦後になって日本人の暮らしが西洋化するにつれ、普段着としてのキモノの生産量は減ってきました。またオートメーションの技術が進み、機械で作られたキモノも増えてきました。

昭和50年あたりになると、日本の高度成長が進み、海外でキモノが生産されるようになり、日本国内において人の手で作られるキモノは高級品ばかりになってきました。

そして平成時代になると、この変化はいっそう進み、キモノ専門店が扱う昔ながらの手作業で作られた高級なキモノと、デパートやチェーン店が扱う量産品とに大きく分かれてきました。

三輪　信之

住　　所：愛知県新城市
生年月日：1963年2月3日
合資会社：三ツ輪呉服店代 表

平成2年より家業を継ぎ、販売のみならず、着物文化の啓蒙活動として、近隣のギャラリーにて販売活動を一切行わない「売り申さずの会」を開催、着物や業界に関する本当の話を広く伝える活動を行う。また、まちづくり第3セクター会社「山湊」取締役として色々な地域活動も行っている。